太宰治「人間失格」論

――受難者としての「大庭葉蔵」――

田部井　実夢

これまでの『人間失格』論は、『人間失格』以前の太宰治作品を振り返っている言説が多い。『人間失格』は太宰の死の時期と重なるため、太宰治本人の人生や出自を意識して書かれた作品なのではないかといわれている。臼井吉見氏は「『人間失格』は文字どおり、太宰の遺書であつた。死ぬときに書き残して行つた遺書よりも、遺書である。太宰という一個の人間と作家が、その生涯をかけて書きあげた遺書であった」[1]と述べている。

本稿ではこの通観を踏まえて、先行研究で示された読解態度のいずれとも異なる立場から『人間失格』を論じたい。つまり本作を〈太宰の遺書〉ではなく、〈受難者としての大庭葉蔵像〉として読むことを選択する。本稿の目的は、太宰自身の内側に隠れている思いを読み込むのではなく、言葉として提示されている太宰の聖書やキリスト教への深い理解が実際に作品世界にはどのように投影され、形象化されているのかについて、個別の作品を解釈することによって明らかにし、キリストの教えの下にもがき苦しんでいる人間を描いたものとしての『人間失格』読解の可能性を導き出すことである。そのために本論では『人間失格』という作品と読者の関わりについて、俯瞰的な視点から考察する。

一　『人間失格』における「隣人愛」

『人間失格』の主人公である葉蔵は自分自身が人間であることに終始、違和感を抱いている。以下の節では本文を引用しながら、葉蔵の心境に触れ、他者から見た葉蔵は「神様みたいないい子」であった理由を明らかにしていく。

①人間は、めしを食べなければ死ぬから、そのために働いて、

めしを食べなければならぬ、という言葉ほど自分にとって難解で晦渋で、そうして脅迫めいた響きを感じさせる言葉は、無かったのです。

（『人間失格』十二頁）

右の引用から葉蔵には人間の感覚がなく、三大欲求の一つである「食」を失っているとわかる。「子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の時間でした。」とあるように、葉蔵にとって食事が最も苦痛であったことから、家族で食卓を囲んでご飯を食べることが楽しいことではなく、ただ腹を満たすだけの時間であった。それ故、葉蔵は「空腹」という感覚が理解できず、「食」とは「脅迫めいた響き」を感じるものの一つだったのかもしれない。

ここから『人間失格』はもちろん私小説と違って事実そのままではないが、より深い原体験をフィクショナルな方法により表現しているといえる。『人間失格』は「太宰治がはじめて自分のためにだけ書いた作品であり、内面的事実の精神的自叙伝である。[2]」と述べているように自己の主観が作品内に投影されている。これから引用する本文にも葉蔵の中に太宰としての事実が含まれている可能性があることを念頭に置きながら考察していく。

②隣人の苦しみの性質、程度が、まるで見当つかないのです。（中略）自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。

（『人間失格』十三頁）

ここでは「隣人愛」が崩壊している。それもそのはずである。自分自身のことを理解していないのだから、隣人の苦痛を理解できるはずがないのである。太宰は昭和十一年、二十七歳の時、中毒を治すため、強引に精神病院に入院させられる。その時に、太宰は人間の資格を剥脱され、もう人間ではなく、芸術家という、一種奇妙な動物として生きているだけだという意味のことを、後年語っている。人間としては死んでしまった太宰にとってまず前提として、自己愛が必要である「隣人愛」という教えを理解することができなくなってしまったと考えられる。

二　「道化」を演じる「大庭葉蔵」と「太宰治」

③そこで考え出したのは、道化でした。

それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。自分は、人間を極度に恐れていながら、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかったらしいのです。そうして自分は、この道化の一線でわずかに人間につながる事が出来たのでした。

おもてでは、絶えず笑顔をつくりながらも、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合いとでもいうべき危機一髪の、油汗流してのサーヴィスでした。（『人間失格』十四頁）

太宰は子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさえ、彼等がどんな思考を持って生きているのか見当もつかず、その気まずさに耐えることが出来ず、道化を演じ、上達していってしまった。ここで注目したいのは「サーヴィス」という言葉である。人間の目障りにならないためにも、思考のない空の人間として道化の「サーヴィス」を行っていた。しかし、「人間を、どうしても思い切れなかった」のは自分の居場所が欲しかったからではないか。辛うじて人間の姿でいられる自分を手放したくなかった。もしくは自己の抱えている内的事実を、それを守るための苦闘の生涯を真正面から造型し、人間に抗議するためだったのではないか。

④つまり、自分には、二者選一の力さえ無かったのです。これが、後年に到り、いよいよ自分の所謂「恥の多い生涯」の、重大な原因ともなる性癖の一つだったように思われます。（『人間失格』十七頁）

太宰の言う「恥の多い生涯」とはどういう生涯のことを指しているのか。それは自分の将来を自分で決められず、他人に導かれる生涯であろう。太宰が精神病院に入院させられた時に「今までの自己の主観的事実、正義、倫理、芸術のため行って来た苦闘が、世間からは単なる狂人の言動として見られていたという衝撃」[3]を与えた。ここから俗世間は偽善に満ちた悪の塊であり、人間が挫折したときに非人間性をあらわにする場所となった。二者択一を迫られた時、自己の判断力が無いため「恥の多い生涯」を送ってしまうことになるという自己の内的事実に忠実であるが故に、自己が崩壊していく様が描かれている。

⑤所詮、人間に訴えるのは無駄である、自分はやはり、本当の事は何も言わず、忍んで、そうしてお道化をつづけているより他、無い気持なのでした。（『人間失格』二二、二三頁）

ここでもまた自己韜晦が現れている。苦悩を人に見せないことは心遣いでもあるが、この場面では見せることが出来なかったのである。世間という偽善に満ちた悪の塊によって弱者を救う道は用意されてなかった。それ故、「本当の事は何も言わず、忍んで、そうしてお道化をつづけているより他、無い気持ち」であったの

だ。近代の功利的物質中心主義の中で、個人の存在が疎外されようとする時、徹底した精神主義で、それに抵抗しようとするも、太刀打ちできない状態を示している。

⑥人間が、葉蔵という自分に対して信用の殻を固く閉じていたからだったと思います。（『人間失格』二五頁）

人間の普通が通用しない葉蔵には人間からの信用を得ることはできない。葉蔵自身も人間を信用していなかったのだから、相互信頼が成り立つ訳がないのである。道化を演じることが習慣化してきてしまい、自分の真の姿を忘れてしまった。自分自身に対しての信用というものがわからなくなってしまい、孤独化する。しかし、この自分の孤独の匂いが女性の本能に刺さり、つけ込まれる誘因の一つになっていく。自分の考えも発せず、誰にも訴えない葉蔵は女性にとって秘密を守れる男であり、さらに自己の人間恐怖を増していくことになる。

三　本性が現れ始める「第二の手記」

⑦自分のお道化は、所謂「ワザ」では無くて、ほんものであったというよう思い込ませるようにあらゆる努力を払い、あわよくば、彼と無二の親友になってしまいたいものだ、もし、その事が皆、不可能なら、もはや、彼の死を祈るより他は無い、とさえ思いつめました。（『人間失格』二九頁）

右の引用から葉蔵にとって道化とは葉蔵であるための全てであり、その道化が偽物であるとばれてしまう恐怖にかられている。自分から道化を取ったら何も残らず、ただの物体としての人間が残ることに怖れを抱いている。そして、「自分は、彼を手なずけるため、まず、顔に偽クリスチャンのような「優しい」媚笑を湛え」竹一を自分の家に誘う。ここでは「優しい」という表現が使われているところに注目したい。今まで冷酷な言葉を用いて人間を表現してきたが、キリスト教徒のことは温厚な言葉で表現している。ここから、人間ではなくなってしまった太宰の心にもキリストとは優しく、自己を導いてくれる存在であったと読み取ることができる。

⑧惚れられるつらさ、などという俗語でなく、愛せられる不安、とでもいう文学語を用いると、あながち憂鬱の伽藍をぶちこわす事にはならないようですから、奇妙なものだと思います。（『人間失格』三二頁）

この作品は三人の女性の登場により、葉蔵の人生を大きく左右する。その前触れであるかのように感じられる箇所である。ここでは、自分からのめり込む「愛」と相手からのめり込まれる「愛」とでは異なる大きさがあり、前者の場合、伽藍（キリスト教の大聖堂）が崩壊するほど自分にも他人の人生にも大きな影響を及ぼす「愛」である一方、後者は「愛」によって崩壊することはないが、自分自身が愛されることに不安を覚え、自分の手には負えないほどの何か漠然とした「愛」であると考えている。

⑨その他、女に就いてのさまざまの観察を、すでに自分は、幼年時代から得ていたのですが、同じ人類のようでありながら、男とはまた、全く異った生きもののような感じで、そうしてまた、この不可解で油断のならぬ生きものは、奇妙に自分をかまうのでした。

（『人間失格』三三頁）

右の引用は、太宰が永遠のテーマとして掲げていた「対義語の関係性」としての一つ目の対象である。男と女が対の関係になっており、同じ人間だが、女の思考は全く読むことが出来ず、女の行動は一見容易に見えても油断していると不意をつかれるのである。葉蔵は先の読めない行動をする人間を少し毛嫌う性質がある。自分の範囲外で動かれてしまうとどのように処理してよいのかわからず、冷静な判断で物事を捉えることができなくなる。つまり、葉蔵は人間味のある人間が苦手であった。作品内の喜劇、悲劇名詞遊びに当てはめると男が悲劇で女が喜劇となる。何故ならば、振り回されるのが男で振り回すのが女だからである。

⑩しかも彼等は、それを道化などでごまかさず、見えたままの表現に努力したのだ、竹一の言うように、敢然と「お化けの絵」をかいてしまったのだ、ここに将来の自分の、仲間がいる、と自分は、涙が出たほどに興奮し

（『人間失格』三九頁）

葉蔵は今まで道化で人生を誤魔化してきたが、一群の画家たちのありのままの自画像を目の当たりにしたとき、自分にもこんな表現方法があったのかと理解する。困難や危険を伴うことは覚悟のうえで、思い切って行うさまに感動し、絵の中だったら自分を誤魔化さずに表現でき、その絵は自分の中に閉まっておくことができることから「ここに未来の自分の、仲間がいる」と興奮した。そして

⑪何でも無いものを、主観に依って美しく創造し、或いは醜いものに嘔吐をもよおしながらも、それに対する興味を隠さず、表現するよろこびにひたっている、つまり、人の思惑に少しもたよっていないらしいという、画法のプリミチヴな虎の巻を、竹一から、さずけられて、れいの女の来客たちには隠して、少しずつ、自画像の制作に取りかかってみました。

（『人間失格』四〇頁）

という結論に至る。今までは自分がしたことに対する人間の反応や評価を気にしていたが、自己の主観のみで創造することは自分らしい表現方法につながる。このように、竹一と友達になってから葉蔵は段々と自己を偽らなくなってくる。

⑫自分でも、ぎょっとしたほど、陰惨な絵が出来上りました。しかし、これこそ胸底にひた隠しに隠している自分の正体なのだ、おもては陽気に笑い、また人を笑わせているけれども、実は、こんな陰鬱な心を自分は持っているのだ

（『人間失格』四〇頁）

人間の思惑を気にしないことで、自分でも驚くほどの暗くむごたらしい一面を再確認する。道化を演じ過ぎた自分の胸底には図り切れないほどの陰鬱な心を持っていた。それこそが自分の正体である。しかし、この絵を竹一以外の人に見せ、新趣向の道化と見なされ笑いの種にされることへの懸念から自分の奥深い胸底へとまたしまい込むのである。やはり、竹一の前では道化を演じずに、ありのままの自分でいられるが、その他の世間の目が気になり、一群の画家たちのように自画像を掲げることはできないでいた。

⑬非合法。自分には、それが幽かに楽しかったのです。むしろ、居心地がよかったのです。（中略）外は非合法の海であっても、それに飛び込んで泳いで、やがて死に到るほうが、自分には、いっそ気楽のようでした。

（『人間失格』五一頁）

⑭自分は、自分を生れた時からの日蔭者のような気がしていて、世間から、あれは日蔭者だと指差されている程のひとと逢うと、自分は、必ず、優しい心になるのです。そうして、その自分の「優しい心」は、自身でうっとりするくらい優しい心でした。

（『人間失格』五一頁）

右の引用の「日陰者」にも津島家の社会的立場が関係している。ここでいう「優しい心」とは、⑦で挙げた「偽クリスチャンのような「優しい」媚笑」と同じ意味だと考える。人間には感じたことのない心温まる「優しさ」とは罪を与えながらも、自覚し認め行動に移すことを教えてくれた、イエス本来の優しさである。

⑮世の中の人間の「実生活」というものを恐怖しながら、毎夜の不眠の地獄で呻いているよりは、いっそ牢屋のほうが、楽かも知れないとさえ考えていました。

（『人間失格』五三、五四頁）

葉蔵にとって人間の「実生活」とは偽りで固められた生活でしかなく、いつその嘘が周知されるかの恐怖の中で生活していくことは地獄であった。先にも述べたように「感受性の犠牲者」であるが故、いつどんな時でも外界の刺激を受けやすく苦悩と共に生きている。人は皆幸福を求めるが、葉蔵は苦悩を求め、その苦悩の中に幸福を感じるのである。

⑯自分はやはり敗北のお道化の苦しい笑いを伴わずには、挨拶できないたちなのです。

（『人間失格』六〇頁）

自分自身の環境を変えてもやはり自分は道化を演じながら生きていくことしかできず、さらに自分に特別な好意を寄せている女性に対して機嫌を取るようになるなど、みるみるうちに怠惰な生活へと転げ落ちていく。道化という行為について久山康氏は「人の意表を衝いて一挙に相手の心の中に入り込み、隠された人間性の共通の弱点に楔を打ち込んで、人の心を自己の掌中に収めるという意図」[4]があるとしている。

太宰は「人間に対する最後の求愛」として道化という行為を行ったのである。葉蔵は「人の意表を衝いて一挙に相手の心の中に入り込み」「人の心を自己の掌中に収める」という点では模範となるような道化を演じている。また、「自己貶下」を常に行っていることから葉蔵は「最後の求愛」を事細かに行っていたとわかる。つまり、道化を通して人間に最後の期待を抱いていたのだろう。

⑰侘びしい。

自分には、女の千万言の身の上噺よりも、その一言の呟きのほうに、共感をそそられるに違いないと期待していても、（中略）無言のひどい侘びしさを、からだの外郭に、一寸くらいの幅の気流みたいに持っていて、そのひとに寄り添うと、こちらのからだもその気流に包まれ、自分の持っている多少ト

ゲトゲした陰鬱の気流と程よく溶け合い、「水底の岩に落ち附く枯葉」のように、わが身は、恐怖からも不安からも、離れる事が出来るのでした。

（『人間失格』六三頁）

右の引用から「無言のひどい侘びしさ」を持っているツネ子にわが身を委ねていることが読み取れる。しかし、ツネ子の侘びしさは「一寸くらいの幅の気流」なのに対して葉蔵の侘びしさは「多少トゲトゲした陰鬱の気流」と対照的である。ツネ子は侘びしさを持っていながらも、葉蔵の侘びしさを包み込むような静かで物寂しい雰囲気を帯びていた。そのすっと入り込めるような侘びしさに葉蔵は安心と共に解放されたのだ。また、自分のように計り知れない孤独を持ち得ていたことが、葉蔵にとって苦悩の中の幸福だったのかもしれない。

しかし、「朝、眼が覚めて、はね起き、自分はもとの軽薄な、装えるお道化者になっていました。弱虫は、幸福をさえおそれるものです。綿で怪我をするんです。幸福に傷つけられる事もあるんです。」とまた元の葉蔵に戻ってしまう。やはり、「感受性の犠牲者」である葉蔵は幸福を恐れるのであった。幸福であるがために、次の苦悩を考えてしまい、その幸福に傷つけられてしまうのである。

⑱金の無い者どうしの親和（貧富の不和は、陳腐のようでも、やはりドラマの永遠のテーマの一つだと自分は今では思っていますが）

（『人間失格』六九頁）

⑲罪人として縛られると、かえってほっとして、そうしてゆったり落ちついて、その時の追憶を、いま書くに当っても、本当にのびのびした楽しい気持になるのです。

（『人間失格』七六頁）

右の引用から葉蔵はいつも人間を裏返して見ていたことがわかる。瀬沼茂樹氏が太宰の文学について「つねに人間とその世界を裏返しにして、この裏返しにした心情からしか、この世を語ることはできなかった」[5]と述べるように、『人間失格』の中には、太宰の孤独な心情を他人に訴えずにはいられない気の弱さ、そこに人を惹きつける純粋性を見出すことができる。自分の中にある曖昧模糊とした感情を明確に言語化してくれるのが『人間失格』であり、誰しもが持っている人間の弱い部分に共感を得るような作品となっている。

四　太宰治自身について語られる「第三の手記」

⑳れいの自分の「必死の奉仕」それはたといゆがめられ微弱で、馬鹿らしいものであろうと、その奉仕の気持から、つい一言の飾りつけをしてしまうという場合が多かったような気もする

（『人間失格』八七頁）

道化が染みついてしまった葉蔵は、何をするにも必ず何かしら飾りをつけて誤魔化すようになった。その誤魔化しが自分にとって不利益になるという事がわかっていても「自分の哀しい性癖」のために、習慣化してしまった。葉蔵にとっては相手の想いを深読みしすぎることで、世間の所謂「正直者」たちから、いいように操られてしまう。ここでもまた、葉蔵の純粋さが世の中の不純な人々の思惑通りに行動する結果をもたらすことになる。

⑪の引用箇所「何でも無いものを、主観に依って美しく創造し、或いは醜いものに嘔吐をもよおしながらも、それに対する興味を隠さず、表現するよろこびにひたっている」それが太宰の文学作法の種本でもあった。

㉑内と外をちゃんと区別していとなんでいる東京の人の家庭の実態を見せつけられ、内も外も変りなく、ただのべつの幕無しに人間の生活から逃げ廻ってばかりいる薄馬鹿の自分ひとりだけ完全に取残され、（中略）たまらなく侘びしい思いをしたという事を、記して置きたいだけなのです。

（『人間失格』九一頁）

本来ならば、家とは安らぎの場所であるはずだ。ありのままの自分でいられる自分の居場所であるはずだが、太宰の場合、家をそういった感情で見ることはなかったのだろう。太宰にとって義とは、万人に認められる作品を書くことであるが、太宰は有名になるにつれて厳しい文学批判を受けることが少なくなかった。義を優先すれば家庭の幸福が築けない、しかしだからといって太宰にとって義を曖昧にはできないのである。家の中と外における自分の立場の有りようを考えた結果、家には自分の居場所がなく、太宰にとって内と外を区別して生活することは不可能であるという答えを導くしかほかなかった。それ故、葉蔵は堀木の家庭の実態を見せつけられたときに、自分だけが家庭の中で上手くいっておらず、取り残されたという劣等感を抱く。そして孤独な心情である「たまらなく侘びしい思いをしたという事」を訴えずにはいられなかったのである。

五　『人間失格』における神とは

㉒神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じているのでした。

（『人間失格』九七頁）

福田恆存氏が「神の愛は信ぜられず、神の罰だけを信じているのでした。」の箇所について「大宰治は自己を責める『神』は発見したが、自己を許す『神』は発見しなかったのだ」[6]と述べている。「苦悩を求め、不幸が外的に存在しないときでも、苦悩をもっていると考え」ていた太宰は「自己を責める『神』＝苦悩は発見したが、「自己を許す『神』＝幸福を発見することはなかった。むしろ発見するつもりさえなかったのかもしれない。

そもそも、『人間失格』で言及されている神とはキリストであることを前提として論じてきたが、太宰の「神」概念の多様性を探るために三谷憲正氏が「日本近代の「Ｇｏｄ」の訳語「神」は、奇妙なことに明治の天皇制国家における「天皇」と二重映しを生じている」[7]とも述べているように、『人間失格』の聖書的な文脈の中で理解していたはずの神・キリストは、「多義的な世界を持っている」ことが考えられる。以下に「多義的な世界を持っている」神の本文を引用する。

㉓神社の杉木立で白衣の御神体に逢った時に感ずるかも知れないような、四の五の言はさぬ古代の荒々しい恐怖感でした。

（『人間失格』一二八頁）

㉔神に問う。信頼は罪なりや。

（『人間失格』一三〇頁）

三谷憲正氏は、㉓の箇所で神が「「古代の荒々しい恐怖感」をもたらす「白衣の御神体」が喩として現れ」[8]る理由を以下のように述べる。

ここの「神」（㉔の傍線部）がキリスト教的、すなわち聖書的文脈で理解しなければならないのは「……神、……救ひ、……愛、……光」とある引用のとおりである。しかし、それがなぜ、「白衣の御神体」なのか。おそらく、ここにも、先に述べたように聖書における訳語としての「神」が、ここでは「天皇」ではないにしても、やはり『古事記』的世界の「神々」に通底してしまう機微が伏在していると考えられはしないだろうか。[9]

この指摘から「日本近代の「神」は、明治の天皇制国家における「天皇」と二重映しを生じている」が故、太宰の文学にも「キ

リスト」と「天皇」二つ以上のものの姿が重なり合っているのである。どちらが正しいという答えはなく、その時の心情に合わせた神の対象を用いることで、より読者に共感を得ていたと考えられる。

また、熊田一雄氏は、太宰の宗教心理について「他者による承認」も、「超越者による承認」も否定した結果であるとしている。[10] ここでいう「他者による承認」「超越者による承認」も否定した結果とは『人間失格』の結末部分を指している。以下は本文の引用である。

㉕「私たちの知っている葉ちゃんは、（中略）神様みたいない子でした」（『人間失格』一五五頁）

右の引用から「他者による承認」に加えて「超越者による承認」も拒絶したからには、「神様みたいない子」と、「自己承認」するしかなかったのだと思われる。『人間失格』の結末においてはじめて焦点化ゼロの視点が登場する。いわゆる全知の視点である。自らを客観した結果、得られるものは主観に過ぎない。客観的に考えるとは、可能そうで不可能なのだ。別人の自我を拝借することは出来ないからである。客観は、あくまでも非我からしか得られないのである。葉蔵は自分の罪を自覚している。「罪を自覚できる」ことは原罪を知りながら生きていることになり、自分には救いが必要であると理解しているのである。また、葉蔵が罪を犯し、他人に迷惑をかけ続けたのは、葉蔵が精神的に、内面的に豊富だからである。葉蔵は他人の痛みがありありと自分の痛みのように感じられる存在だった。だからこそ、葉蔵は自分の殻に閉じこもろうとした。そして、愛そうとして誤って傷つけ、またその傷を自分の痛みとして感じたのだ。以上のことを久山康氏は「太宰の苦悩とキリストの苦悩とには、一脈相通ずるものがあった」[11]とした。

自分との共通点を発見したから、キリストについて興味を抱き、その教えを学んだ。しかし、学べば学ぶほど自分よりも遥か遠い場所に存在するキリストに真の人格を知る。自分はキリストにはなれないが、この人のような苦悩の中に真の人格をみる人間でありたいという思いが「神様みたいない子でした」の一文に現れているのではないか。『人間失格』の作中では何者にもなれずに、人間にも失格する。そんな失格だらけの人生の中で、人間にもなれないのなら、いっそのこと人間を超越した神様になりたい。その思いを焦点化ゼロの視点（神の視点）を用いて『人間失格』を完結させたのである。

六　「同義語」と「対義語」の中に自分像を見る太宰治

『人間失格』の「第三の手記」で葉蔵と堀木は、対義語をモチーフとした遊戯を行う。この対義語遊びの中に太宰の思想の根底があると考えた。悲劇と喜劇、対義語と同義語この二つの関係は常に表裏一体であり、人間はその狭間で生きている。太宰治は倫理的宗教的な考えを持っていたため、苦悩とは自分だけのものではないと考えていた。この相容れないようで繋がっている言葉の複雑さの中に太宰は自分像を見ていたのではないか。『人間失格』の主人公葉蔵は道化を演じ、人を欺き通した人生の終わりには自らが一番信頼していた人によって欺かれる。人が発する言葉、書き残す文字には欺きがあり、真実とは純白に見えて漆黒であるそんな思想を太宰は持ち得ていたといえるのではないか。

この節では本作で答えが記されなかった罪の対義語を明確にする。作中、葉蔵は「神に問う。信頼は罪なりや。」「神に問う。無抵抗は罪なりや？」と罪の対象を神に問う。ここから、この言葉と反対の意味を持つものが罪の対義語であるとわかる。不信で抵抗するもの。それは人間である。罪を自覚しておらず、自分の生まれ持った役割を全うしていない人間。先にも述べたように対義語と同義語の関係性は常に表裏一体である。つまり、私は狂人であると罪を自覚していた太宰の対義語は人間なのである。人間という個体を持ちながらも人間に失格する。太宰自身が罪であり、その対義語である人間とは相容れないようで繋がっている。この言葉の複雑さの中に太宰は自分像を見ていたが、自らを客観しても得られるものは主観でしかないため、『人間失格』において罪の対義語を明確化することができなかった。

佐古純一郎氏は「人間失格ということがらに問われていることは、人間がもはや人間でなくなるということよりも、むしろ、人間が人間になるということではないかと考える」[12]としていたが、たしかに『人間失格』の苦悩とは葉蔵が人間になろうとする姿勢そのものであるといえる。しかし、考えれば考えるほど人間ではなくなってしまう矛盾の中でもがいている。

こんなにも追い込まれてしまった所以は、家族関係に恵まれず、精神病院に連れてこられ、結局一人になり狂人となってしまった自分に直面するからである。「人間、失格。自分は、完全に、人間で無くなりました。」と人間でない自分を認めざるを得ない環境に自らが存在していたのである。しかし、「風の便り」では「自分の醜態を意識してつらい時には、聖書の他には、どんな書物も読めなくなりますね。さうして聖書の小さい活字の一つ一つだけが、それこそ宝石のやうにきらきら光つて来るから不思議であう。」と

述べている。この状況は精神病院に入院させられたときの太宰と、かなり近い感慨を抱いていたにちがいない。ここから太宰にとってキリストとは自分が最終局面を迎えたときにそっと手を差し伸べてくれる存在であった。

『人間失格』を最後まで読み、もう一度「第一の手記」に戻ると冒頭の「恥の多い生涯を送って来ました。」の一文に目が留まる。この一文こそが『人間失格』を表しているのである。人間の生活というものが見当つかないほど、自分が人間になることができず、ただ時は過ぎていくという真理の中で生涯を送ってきた。それは太宰にとって「恥の多い生涯を送って来ました。」となるのである。

結論

『人間失格』おいて、これを〈太宰の遺書〉ではなく、〈受難者としての大庭葉蔵〉の造形を通じて「罪の自覚」を描き、それは太宰の感受性の敏感さと、それを培った深い宗教的精神にあると論じた。

『人間失格』におけるキリストは、自己を責める神であり、自己を許す神ではなかった。「感受性の犠牲者」だった太宰にとってキリストとは、苦悩の中に一脈相通ずるものがあり、自分をさらに苦悩の最も深いところへ連れて行き、真の人格を見せてくれる存在であった。『人間失格』の中には、太宰の孤独な心情を他人に訴えずにはいられない気の弱さが垣間見え、そこに人を惹きつける純粋性があった。キリストは自我を周りに見せてこなかった。しかし太宰の文学は、自分の中にある曖昧模糊とした感情を明確に言語化し、誰しもが持っている人間の弱い部分に共感を得るような言葉を残していった。ここから、『人間失格』におけるキリストとは自分と比較しながら、より完全な人間になるための要素を教えてくれる存在であった。『駈込み訴え』『正義と微笑』『人間失格』といった作品に共通している点は、キリストとは人間を創り上げる存在であり、人間の模範であるということだ。太宰は人間を創り上げたキリストを時に憎みながらも、人間を誰よりも理解したいという思いが切にあり、キリストと同じような思考を持つことで、人間になることができるのではないかと考えていた。人間になり切れず諦めていたその最後の希求がキリスト自身であり、追い求めることで太宰は人間である自分に存在意義を見出すことができたのかもしれない。罪を自覚し、常に苦悩と共存していた太宰治（受難者としての大庭葉蔵）にとってキリストとは、自分が人間であるための糧であった。

注（1）『太宰治全集10小説9』筑摩書房、一九九九年、六〇五頁

（2）太宰治『人間失格』新潮社、二〇二〇年版（奥野健男「太宰治の人と文学」、一六四頁）
（3）太宰治『人間失格』新潮社、二〇二〇年版（文芸評論家『人間失格』について、一九七二年九月、一七三頁）
（4）『現代日本キリスト教文学全集18』教文館、一九七四年、二五二頁
（5）『太宰治全集10　小説9』筑摩書房、一九九九年、六三二頁
（6）佐古純一郎『太宰治におけるデカダンスの倫理』春秋社、一九六〇年、一〇〇頁
（7）三谷憲正「日本近代の《神》の混乱―太宰治における《神》の概念探求序説」佛教大学国語国文学会、京都語文、五号、二〇〇〇年三月三十一日
（8）註七に同じ
（9）註七に同じ
（10）熊田一雄「小説『人間失格』における宗教心理の一考察」愛知学院大学文学部紀要三十九号原稿、二〇一〇年三月
（11）註四に同じ
（12）佐古純一郎『太宰治におけるデカダンスの倫理』春秋社、一九六〇年、一六〇、一六一頁

【本文テクスト】太宰治『人間失格』新潮社、二〇二〇年版

（二〇二〇年度卒業）